

幅跳び競技選手の股関節病変に対する関節鏡・鏡視下手術の有用性

岡山大学医学部・歯学部附属病院 整形外科

阿部信寛, 林 智樹, 吉鷹輝仁

岡山大学大学院医歯学総合研究科 機能再生・再建学専攻 整形外科

迫間巧将, 伊達宏和, 三谷 茂, 尾崎敏文

【目的】陸上競技選手に生じる股関節周辺のスポーツ傷害は周囲筋の慢性炎症などによることが多く、関節内病変は比較的少ないとされてきた。我々は幅跳び競技選手における股関節内病変に対し、関節鏡による診断および鏡視下手術を施行し、良好であった症例を経験したので報告する。

【症例】17歳、男子、幅跳び競技選手。主訴は左股関節痛である。平成14年9月、走り幅跳びの踏み切り時に股関節痛が出現した。平成15年1月より疼痛が増悪し、近医において股関節炎の診断で牽引療法を施行されたが、Patrick sign 陽性で疼痛が持続するため当科紹介となった。X線検査では左股関節関節裂隙の軽度狭小化を認め、またMRI検査では関節液の貯留を認めた。関節内病変と診断し、全身麻酔下に股関節鏡を施行した。関節内所見では多数の関節遊離体、滑膜増殖、関節唇軟骨移行部の断裂が認められた。鏡視下デブリドマンを施行し、術後11ヵ月には可動域制限や疼痛なくスポーツ復帰し、術後3年でのMRI検査では大腿骨頭および臼蓋の変性を認めるが、疼痛無く受傷前のスポーツ活動に参加している。

【考察】幅跳び競技はその着地時に、大腿骨頭と臼蓋での強い圧迫と捻りの力が生じる。本症例でもその外力が繰り返され、関節唇損傷や関節内遊離体を発症したと考えられる。股関節鏡は侵襲少なく関節内処置が可能であり、また十分な病態評価を可能で有用な手技と考える。